

竹取翁物語

三



尾張小川
宜之藏書

るをいハ上よ委云と○ふう〜ゆ〜のハ宇治拾遺十人信の心
と起〜富その財りてきて家内ゆ〜うに成ぬ猶上れ
金何竹取翁の豊饒ユツカをなれ。処可考○家ひろき〜ハる御屋
鋪の廣き由ハ何〜御家門の一族数多なる〜と云るなるは
し上解翁の姫ヲ男定べき吏を勧る処に門も廣くと云る同意
よ〜一族と一家富貴〜家門繁昌〜大臣なる由なり○
人まごハ写本によりつ抄本ヲ人みて〜なり○其年〜り〜ハ
古本ヲ後つ抄本ヲ來と〜なり○〜船の〜け〜
云ものハ類本ヲ〜人〜高タカキの〜來泊する唐人なり。〜
け〜ハ今作する名な〜し○心慥なるを撰てハ其え〜

ふ人の房守なり○きの〜ふ〜もりと云人をき〜ハ書狀ヲ房守
を添附〜王卿が許は〜なり

も〜むりて彼〜
けい文をひらぎて〜
なりが〜ハき〜
此國も〜
さ〜
何〜
バ〜

○もて到てハ抄本で字なし博多浦ヲ持て到るなり○彼浦ヲ

古板本に唐とかく、はうらと見て誤りなりそび又写本
みもろこしと作り今ハ抄本よりとるをとりつさして其浦ハ古昔
異國船の著し浦も筑前國博多浦と心得べし。續紀廿天平宝字
三年三月庚寅太宰府言府官所見方有不安者四據警固式於博多大
津及壹岐對馬等要害之處可置船一百隻以上以備不虞。太宰府者
三面帶海諸蕃是待而自罷。あ廿八年七月甲寅新羅使大奈麻金
才伯等九十一人到著太宰博多津。あ廿續後紀卷八承和六年十月
丁巳遣唐使錄吏正六位上山代宿祢武益所駕新羅船一艘舩著筑前
國博多津。あ廿三代實錄十貞觀八年十月三日甲戌先是九月一日
大唐商人張言等四十一人駕船一艘來著太宰府是日勅太宰府安置

鴻臚館隨例供給あ廿元慶元年八月廿二日庚寅先是太宰府言去
七月廿五日大唐商人崔鐸等六十三人駕一艘船來著管筑前國問其
來由崔鐸言從大唐台州載貴國使多安江等頗賫貨物六月一日解纜
今日得投聖岸是日勅宣依例安置供給貞觀の例と按て安置の下鴻
臚館三字を脱する供給の
下出雲國と云と出雲國ニハベラシムと訓と何も先博多著
うけと誤とゆも出雲國ハ次条の始なるべし。と何も先博多著
て太宰府徙居なるべし。是等ハ商人なる公オホキ子奏て格別なれ
免鴻臚館に置けひさ々ぬハ博多浦に居しぬ。へし散木集り俊頼
朝臣の父太宰府あり薨けひし後の致け詞書にちうへし侍る唐
人どもは数多あつて來り訪る。ま廿宇治拾遺十に定重唐人子か
この程は日数つゆり博多と云所著りけり定重船よりか

すゝ物もののしるし唐人の許ゆるり行ゆり終はる唐人も待悦まちえつく酒の
すもなきしと何なにもと按おべし○金かねとやういふ裘かみの價あら金子かねなり
此段この金字かな多おほし皆みなここの訓しべし只ただこの何なにもハ脱だつきりなり和名
抄しす爾雅に云い黄金謂を之湯たつ徒たつ黨たう其美者謂を之鏐しやう即紫磨金也說文云
銑せん名古加祢な和わ金かね之最有光澤也万葉の家持卿の長歌の久加祢
と何なにり○文ぶんとハ抄本を字なし○文ぶん火鼠かかかるるもも王卿わうの
初度の答文なり○我國わがち手物てなりハ諸本此國この何なにもを秦氏
の我國わがと改かべしと云いはつつ従したがつ我國わがハ王卿わうの本國ほんも唐土たうハ
云いなり先唐國せんも魚うしと云いはし○世よも有物あるハ此國このにも云いハ
王卿わうも火鼠かの皮かわと云い物未見世界せかいも有物ある魚物うも辨わさると實じつも

世界せかいも有物あるハ此日本國このも將來まてまなり王卿わうハ博
多はに居いる此國このハ皇國わうと申まなり○いいややののまま商しやうなりハ得える
き由よしと云いなり○ととし天竺てんハ崑崙こん南海な火州かなど云い國くにハ天竺てんハ近
ううへへままああ天竺てんハ稀まれも有あると思おもへへ天竺てんああるも尋求しゆて
見侍けんららむむなり此國このも唐國たうも既すでに無なし云いるあある天竺てんハ
と云いるなり○多おほままののハ靈異記れい偶ぐ多た真ま佐さ可か爾に解かい匠じやう二合に合あタタと何
也其文その云い女に兒にと驚おどりり父ちちハ彼か父ちち解かい匠じやう次つぎ有あ兒に之家の遂つひ得え
是こ子こ也なり遠江國えん鷄けい田でん茶師ち沙さ中ちゆうに在ある我われとと終はる僧そう叩たた求もと之の解かい匠じやう
得え聞き沙底さ有あ音ね堀ほり見み有あ藥師やく佛ぶつ木像ぼく左ひだり右みぎ耳みみ缺けつ有あ縁えん偶ぐ值ち願げん我われ修しゆ理り
云い万葉の九く子こ詠えい浦島子歌うらみみつつつつ神かみののももああるる解かい匠じやうハ

うひく相か〜ひいなどあるハ字書ヲ説文解匠相遇増韻不期而
會曰解匠河不求不慮相相遇六帖陸奥在云ぬ
玉川のふまさこのみづに逢よしものねとあると此の文ハ未然
を云るゆへに憑ぬクミづ求る吏の幸オキ遇アヒりやきんと末を思ふ
意と聞こり〇もて渡なびハ其出産の國より天竺マなり〇長者
ハ名義集西土豪族也富貴大賈積財鉅萬咸稱長者ト何と其モク賈
ら受宝の中ハ種々珍奇の品も多うべし然バ若其火鼠の裘も
有て買得る吏も何んの若ちくて不買得ハ價の金子返し侍らん
とあり〇使そ〜ハ書翰ヲ付けたと〜房守ヲ金子と添
てなり使ニ添てと有め〜王卿ト共ニ房守も唐土ニ到れ〜

と〜き〜り〇抑此の消息文往返ハ吏詞を多く略し〜バよくせぬ
ハ紛ぬ〜先言ち〜聞てハ此王卿ハ初度ハ返事ニ世ハ難有
物ち〜尋てハ見侍〜〜云と直ニ彼使房守船ヲ乘り歸朝〜
右大臣殿上此消息ハ火鼠ノ裘カら〜求て奉さ〜何も
〜不審ト聞〜詞多〜脱〜〜誰も思ふ〜能〜心を著て
見〜辨〜其畧〜吏をバ悉消息文を以〜〜物ハ
博多〜此文を書て別ニ使〜〜右大臣殿ハ御許ヲ京ニ參
らせ右大臣殿其文を披見〜吏を畧〜又房守王卿ト共ニ唐土ニ
渡し吏を略〜初度ノ文中ハ唐へ渡〜又王卿裘を求得〜文を添〜
房守ニ渡〜吏を畧〜第二度ノ文中ハ彼〜船來〜其

より平安城より陸路行程九百六十里餘有とぞ○るが七日の不
こまづて來りけり抄本のなり三字なし類本より後補つ抄本より來
る古板本よりきつとを改る今きつりとん遠路を不日よ登り
よしけり

文をよみいそくがわの巻からいそく人をせしめしめ
るめしめいそく今よきよめいそくいそくいそくいそく
おちりけりいそくいそく天竺のいそくいそくいそくいそく
いそくいそくのいそくにいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく

十支宛よりいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく

○いそくいそく類本より後つとを改るいそくいそく○此消息の第二度の返
り前條の解より委しき辨置つとを考て知れし○もいそくいそく抄本
で字なし類本に取つとけり○むいそくいそくいそく七字抄本より脱きり
○いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく初度の文より未見物なりぬと云る
結より案れ如く誠より得るいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
○此國の唐國なり今度の王卿の博多より不渡して唐土より居る衣と
文より房守より附贈せしめなり○もいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく

唐土モチキタリを將來しお在し由なり侍ハシハ有の意なり○西の山寺ハ王卿
お住る都の西山お由なり○お不やけお申てハ王卿お私云
入るハ賣ウレまじらぬハ公お申て公お威を以買得ウケたりとことごとく
云たるもぬり○ことごとくハ彼寺何處の國司なり公お申て買更お
送ハ王卿お直の應對おありて國司より寺に應對きし由なり○
使ツカまよりしハ王卿より國司お許遣し使ツカまより代金不足と使
ま對て國司の云るなり諸本お申せしとぬりし申しと云格
なるハ改つさて始申と下より上お告と云言たれば此ハ國司よ
り王卿お使へ云る詞なれば仰ウケきしと云づく思つふいぬ是ハ
右大臣殿お奉る文なれば國司と使への格ハかかるとも更なく右

大臣お對しと加しつと申と云るなり○王卿お物加しハ右大
臣前サキに遣し金不足ハ王卿お金五十兩を添て買得たりとぞ○船お
歸るもよほきてハ抄本おはきてとぞ王卿ハ來朝せぬハ彼唐船
の歸便に送オクりてなり○ふびハ賜なり○お送ハ可送なりお
送ハ云ハ魚サカナ敬ウヤやハおまじと云ふハ敬言ウヤコトなりおか云へきなり
○皮シはぬもハ質シチハ抄本皮を彼と誤り質とハ其かきとの物も
此ハ今俗シロモノハ代物と云の如し宇治拾遺十筑紫太天負重四唐人お物
を六七千疋可程借とて太刀を十腰質に置るとなり
何れお今このひすしハかきよとて何れおかやハ
おまじとてあやまらぬとておまじとておまじと

いふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝ

○何れが右大臣表わねると贖物とも知らざる甚く悦び
心とて王卿に答へ詞と此なる獨言の事○今金少
み更とて何れに諸本少しあり類本は從て改つ何れ
とて惡うべし○必送るべき物とて何れに寫本は從て補
つ按て何れと云更近く二をを見紛へ諸本の脱きもあつし
さて物とてをを必誤と見わねる物と改つ○うねりてハ抄
本し字なり○唐の方に向ひ伏拜ゆ佛祖統記に法師源信は
感平六年遣其徒寂照持教義二十二問請南湖求決法智為其一答
釋照欣領歸國信大服其說西向禮謝とて冷標卷を
明石の乳母
を下しけり

処入道待り悦輝や更限なし其方に向て拜せ御心ごとを
思ひよほほほほ太く悦ぶ意ごとく似たり

此かゝるはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝ
いふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝ
金の光かやまわりけり
○いふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝ
いふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝいふはしつゝ
玉の美麗なる更なり○瑠璃は凡て玉に類を云ふべし魏志注
瑠璃本是石出大秦國凡十種之色と抄有り故に種くのと云ふ○い

ろ〜ハ諸本いろえとあ〜と今假字と改つ下カハなる御行大納
言の屋は処とも可考。又取字の草サダとえと作る。万葉卷七月草イロドリの
衣ぞ深る君ふるめ彩色衣す〜とて。又鴨頭草コモイロの服色取す〜め
ども移らふ色と云う〜しき。又大和物語抄の
色どる風の吹ぬ〜人お心もさ〜る〜り返し秋野と色どる
風ハ吹ぬ〜心ハか〜じ草葉な〜孫バな〜あ〜バいろどる〜
も〜け〜と猶六帖部の春雨に標シラど結らし花ハを〜く〜ハいろ
〜〜咲〜ち〜り。又向阿法師の父子相迎浄土の寶林宝樹會に
到ら〜む見〜バ七宝を磨て七重を〜ひにいろ〜る植木光を〜
ら〜て立並ぶと〜ハ无量寿經抄の或有宝樹紫金抄為本白銀抄為瑩瑠

璃ラ為枝水精抄為條珊瑚抄為葉碼抄為華碑抄為實抄或有宝樹抄と枝葉華
菓互タセ種々取替て云〜と誤〜り。又平家物語抄の那須宗高
扇ヲと射ハる処ヲ与一オホクチかちハ壬社ハつ〜る直垂ヒツレな〜り。ハ色イロ合アハセの義ヨク〜
古吏記雄略天の麻那婆志良表マナバシラヤユキアハ由岐阿閉ユキアハ和名抄和名抄の壺阿倍毛乃ウツアヒモノ乃ノ〜
結ムスあ〜ハせと約ヨクなり故今ハいろ〜の方ハと〜りハとハ工イの如ニ〜呼ヨス
なナ○金青コンジヤクハ和名抄和名抄の本本草草稽稽疑疑云金青者空青クン之最上最上也〜り○金金
光ヒカリか〜やき〜りハ諸本光ヒカリしき〜やき〜り類本ヒカリさ〜り〜り
と〜し字ハ衍シと〜も終シバ除ク校本シに従シ〜と〜か〜改シつ○げシ寶
と見ミハ諸本シげシと云〜〜めきと今補シつ宝シと〜と云言文詞の
拍子ヒタマシ何ナニ〜く〜上下ウヘノヘに詞脱シ〜と云しと本居翁上ヒトげシ


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

○家の門マ、右大臣竹取の家門前マに到て立ちあがり云入イに  
バ翁出来て裘の管マと取入るなり○かの裘ハ諸本加々や姫のと  
を抄本マ加字脱マ。うマ云マ。從て補マ。○さマ。ばマ。手皮マの  
ハ此も皮マ。かマ。きマ。ぬマ。らマ。本もあマ。類本寫本の無マ。從  
つ。めりハ其様と推量意の言マ。はマ。今目前の更マ。ハマ。此マ。叶マ。  
が如マ。ちマ。分て不知と次マ。いマ。て脚疑意マ。ありと  
云マ。り○さマ。皮マ。もマ。ちマ。びマ。てマ。ハマ。

と云マ。係マ。見マ。了マ。真実の皮マ。もマ。えマ。辨マ。へマ。と云マ。り○さマ。  
かマ。抄本マ。ハマ。何マ。かマ。もマ。あマ。何マ。もマ。何マ。もマ。よマ。うマ。○  
志マ。請マ。字マ。の音マ。なり。下マ。解マ。中臣房子勅使の條マ。ハマ。竹取の家マ。  
畏マ。請マ。入マ。とマ。何マ。り。総角マ。卷マ。宇治大君マ。脚病の時マ。世マ。験マ。とマ。聞マ。しマ。人  
此マ。限マ。あマ。さマ。しマ。沙石集マ。卷マ。ハマ。主マ。喜マ。びマ。請マ。しマ。入マ。何マ。り。靈異  
記マ。卷マ。小マ。子マ。部マ。栖マ。輕マ。捉マ。雷マ。条マ。汝鳴雷奉請之耶マ。答マ。曰マ。將マ。請マ。古マ。言マ。ハマ。麻マ。勢  
と云マ。字書マ。請マ。韻會マ。此マ。静マ。切マ。説文マ。謁也マ。左傳マ。僖十年マ。余得請於帝マ。矣マ。と  
何マ。○是マ。とマ。思マ。ひマ。何マ。をマ。字マ。の誤マ。の思マ。へマ。諸本マ。皆マ。をマ。なり  
をマ。下マ。了マ。真実マ。と云マ。言マ。を加マ。心得マ。了マ。下マ。世マ。なマ。物マ。なマ。れマ。ハ  
是マ。とマ。あマ。疑マ。ちマ。思マ。ひマ。宣マ。へマ。あマ。即マ。此マ。詞マ。を具マ。云マ。ふマ。

〇抄本縁をぬよ誤まり〇人なつやくまひきせあきほひそハ諸  
 本佐させぬひまきほひそ類本ハ佐させぬひそ何の上のぬひ  
 ハ衍とゆふ類本ハちうせと脱しつうと見ゆまハ今ハぬひを除て  
 取つ翁何をもよ廿よ比類なき美麗なる袈ねれが實の火鼠ねと  
 思定て此右大臣子遇ぬくと勸むるぬり〇喚居ヨレスエをてまひまひハ門  
 前子待居ぬ小右大臣を喚入く屋の内子居まぬるなり車持皇子ハ  
 推て縁まき上ノボまぬふ子此大臣ハ氣直ま門子待居ぬくと車持  
 皇子ハタスキエタスキぬふ子是ハ人子謀ハカぬぬ利と鈍ニクキとを拳つ  
 物語なり

かゝる物語をいふに必あつてはぬの心もゆふひまを

此のいかにや姫のやとえなるを歌うはぬばとゆふひまをいふ  
 と思ひぬるをいふにちうせと脱しつうと見ゆまハ今ハぬひを除て

〇此一條ハ皆地の詞なり〇かゝるの心もゆふハ諸本女とをを校本  
 子後く改つ鈴木氏云女ハ姫とて竹取の妻と云なるべしと思ひ居ユルなり  
 ぞよオチの翁もオチ姫も此度ハ必姫ハ此大臣子遇コトまぬべしと思ひ居ユルなり  
 〇やものハ和名抄子魚妻曰シメト鰥シメト和名夜無手 魚夫曰シメト寡シメト和名夜無女 と何れと源  
 氏物語子柏木右衛門替とやもの住り過スガつ落凹物語子兵部  
 少輔とやもの臥ゴシてハちど男の獨在ヒトリともやものと有と多く出し  
 て荏野冊子子記ナゲつ〇歎ナゲりしけぬバハ此ハ姫の若き程子夫と定





誤なりと足立、稻直が云ふ宜し上より續くハ姫と翁私言サシゴトなれど  
焼く見せしと云吏を大臣へ宣めしと姫が云なり是次のかくならん申  
と云詞は能叶つと故改つて上より是ごと思ひ給とあるハ此ハ  
貝子云々として語を省くなり○猶ナホハ翁が言ハ世ハ比類なく美麗  
なる姿なりハ眞実の物と心得よと何處と姫ハ其眞偽ハ焼て知べ  
しと云なり眞の物と思つと云ふ付て猶ナホと云るなり

翁が云々といふ事なりといひ大正オホマシをかかちて申といふ

○さうハ然ナなり○いふ翁が云ハ謂イハ字をいふと訓と下解ハ勅  
使の言ハいふ翁の言コトなれぬといふなり字註ハ事有可稱曰有謂失  
事宜不可名言謂亡謂と云々。意なり。姫の言を聞て理コトワハ叶ふり

と翁が諾カミつ答なり○大臣と書つ。此段ハ於ミくや訓べし。師傳記

九云大臣ハ於クイジン不ミかると訓べし古ハ大臣ハ皆如此訓べきなり後世

ハ大臣をわがと云るハ殿舎をも云と一ミく大殿オホノミヤの訛ウまり

又物語書なるに於ミ不ミかると云るハ大殿オホノミヤなりと云翁が○かく

かゝるは上ミ其詞焼て試何ミ省て云るも姫ミの言と申と姫  
の詞と大臣ミ傳ミなり

此段ハ於ミくや訓べし。師傳記  
○唐トウの物なりけしハ類本トウなりしと云るハ今イ辛イし  
唐土トウより買得ミたは本ハ唐トウも魚物イサモノも甚得ミたは物モノなる由

と宣ひのちなり○このみゝのふらふらの類本を取尋此本求ハ誤なり字を取

子誤り也 索也もめ也も也と註し此のハ尋切

求也と字書なり共同意の言を重なる上よものて垣間見

たりかを類なり○何の疑の何のハ大臣此皮を実物と深

く思憑おもなり○字諸本を今補つ以上大臣の脚詞なり

たかひんたかひんたかひんたかひん

○さハ申ともハ翁の大臣に答て如仰可疑ハいあはれと云  
なり然ハとも大臣の何の疑の何のと宣ひたる処めく慥に云  
るハ然ハ仰らるると云ふ翁の自己オノ詞のコレハ申とも  
た云なはれハかゝふとも今もあはれなり上より是云くさよなげ仰

あゝと受く其意を戻さしむ時サウ申マシテモなげ云即是ハ

先ハ此言ハ火鼠皮ハ不焼物と云傳ハ  
已然ハ申ともの意とゆしハ何ん

火おすよまのらるるやのめれなるめくやあぬえと  
くくくく物のはなをけりく

○打くは火中ハ物と入る焼と云也夫木抄九寂蓮ヒツキトリ火烧鳥ノの歌

は思の柴よりさふ山里を猶まびしとや火烧鳴ノなり後拾遺

ヤ○やのせめふりハ大臣翁の云子墮人ハ仰今焼ハ

○のめくやけぬハ皮帛板など薄き物の焼る様を今も

ともめくも云也沙石集ハ火葬ノ子執心の塊ノ不焼幡ノ諸行无

に処火山帝に燃付て油を掛つるやもづくくとややく跡なく失

し〜を鈴木氏云一句も言少な〜いやを〜と云れま○まは〜いこ  
そ句と此〜句断絶キレタエて異物の皮なるは〜と焼つ終〜と云意を含て  
異物の皮なりは〜と治定〜詞なりと鈴木氏云終は是ハ翁  
の詞なり ヤケぬまぐり  
地の詞なり

か〜と〜と〜の〜居〜

○御顔ミソハ草の葉は色〜類本御字なし字類本は従つ諸本色

あ〜と〜古更記中卷 秋山之下氷壯如此竹葉青如此竹葉萋而

青萋アヲミギとあ〜病〜面は青む〜此ハ急〜恥見る時ハ面は

赤く〜と其最甚〜時ハ青く〜をか〜云と宇治拾遺卷ニ 卒

都婆子血付〜。 姫打見るま〜色を〜〜倒タラシ惑い走歸て〜

も青めり〜

か〜や〜の〜と〜

のか〜入〜

た〜の〜か〜

あ〜

○哥ヤケヌ た〜り〜火鼠は皮ハ不焼物と聞し〜今焼〜と終ハ少し

も不残燃〜ハ思の外なる更なりか〜燃〜と兼て

知〜な〜火の外に置て見〜と焼失しハ惜き更〜と

惜イヒの意ハ終の思と火に取成〜後撰集恋一君〜と濡シ袖の

か〜の〜思の外に何終〜伊勢物語百廿一段子鶯の花を

縫ミて笠カサていいな思おもひひははななよよほほてて歸かへららむむちち多たららりり○ぞ有あけ

ふふ抄抄本本そそ字字とと脱だききりり

ききははししるるままししけけるるままおお人人々々ああ倍倍ののおおをを火ヒ鼠ネズミががもも衣イ  
ををももとといいふふかかららやや煙スミはは信しんずずままりりおおままいいふふかかららいいふふかかららいいふふ  
ああるる人人おおいいそそくく飛トビたた火ヒををくくとと信しんずずままりりおおままいいふふかかららいいふふ  
ああららいいののままかかららいいふふかかららいいふふかかららいいふふかかららいいふふかかららいいふふ  
ててぞぞいいげげななれれおおももああへへかかららいいふふかかららいいふふかかららいいふふかかららいいふふ

○歸かへららむむままししけけるる火ヒ鼠ネズミのの裘ニセモノハハ質しつ物ぶつももくく焼ヤケららるるああをを張は合あははくくす

ままままししげげはは歸かへららむむののままししけけるる○大オトコ臣トハハ校オト本コよよ後ノチ々々ハハ字ジとと加カつつ○住スミ

みみふふととぬぬいい古コ叟ソウ記キ 水ミヅ垣カキのの 三ミ輪リン大オホ神カミ活カ玉タマ依ヨ 活カ玉タマ依ヨ毘ヒ賣ウ其シ容コ姿サ端タマシ正ヨシ

放ホウ曼マン有ユ神カミ壯ソウ夫フ相アヒ感メテ共スメル婚ホド住ホド之ノ間マ云ト何ニをヲ傳カらラむム共ニ智チ住ジュとトすスめ

るル訓クニ古コハハ男オトコのノ女メはハ許キさサ來キ通トウ夫フ婦フのノ交カ会クワイすスをヲ住スとト云トす

きキのノ引ヒキてテ委ヰ云トぬヌゆユりリ那ナハハ云トおオもモいイふフ言コトなナりリ落オ凹カ物モノ語ゴ 卷マキのノ兵ヘイ部ブ

將シヤウのノ云ト詞ジ 清スガらラなるル相ア智チ取クぬヌてテけケりリなナ夕セキ貌ボウ卷マキのノ源ゲン君クニもモ

名ナをヲ隠カケしシ何ニもモのノ狐キツネなナらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌ

なナらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌ

那ナらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌ

のノ音ネがガあアらラぬヌ下カミ天テン羽ウ衣イ 其シ下カミのノ委ヰ解カべベ

○かカらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌ

つツ○かカらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌまマらラぬヌ

霜の心やけちち世としふ。哉霜の不解玉勝間三万葉一に杯  
もころも片思す。此項の吾情利ツカコトの生イナ利もなし。又二朝夕一糸  
おしなむハ衢の刀其已呂毛トギコロモ何れハ思吾のつも。又三衾道一を引  
出の山イナトモ妹をぢき山路をゆるハ生跡毛無イナトモいけやハ利心心  
利の利も生る利心もなき心け空けウツ由なりと云れまされハ  
此も為便スベなく氣力の尽ツクるさあを利氣トゲなきつひ。皮衣トコロなるあよ  
氣ケと毛ケ執成トリタシゆるなり氣ハ似氣ニゲなしオウケ肩氣一なしぬどの氣なり○而  
へたしハ繪合エガヒ巻マキハ此物語の更と安倍のたむしむちど乃金と捨  
火鼠ヒツメ思オモひ片時ヒトトキ消キゆるしやあなしと何り。桐壺トウロ巻マキハ更衣卒モウイソツ  
絶ツクてぬると泣ナクさるげハ御使ミツメといへたると帰参キサンする夕見ツクミ

巻マキハ夕見ツクミ君息絶キミイキツクる處トコロ 召入メカる宣ノボひ出デするあやのたふと  
物モノハイ十訓抄ジュンショ三ミ相撲ソウボクの手テ 伊成イナリ少シ寄ヨて弘光コウコウの手を取テ  
前マエより強ツヨクく引ヒキゆるにさうぶにまほびぬあたまアタマこと限カなし  
能ノあへし。師シ云イハ俗言ソコゴンハ張合テウガフちか力チカラは落オチつると云イハ意イなりと云イハ流  
る御主人ミツリノのたふし火鼠ヒツメ裘ホと眞実マコトの物モノと思取オモひヒ赫映カク姫ヒメは遇  
す思決オモて物モノしヒしヒと其心ココロさヒく御心ミココロも空けウツ勇ユウも張テもなく  
す御家ミヤを歸カエるヒと安倍氏アンペノウヂなるヒ其よりあヒしと  
云始イハゆる由ユ云イハる例レイの一ヒト與ヨれ作シるヒ○とハ云イハける諸本モトハ  
字ジなきと例レイに従ツて今補イマホつ

珠のそと珠

大伴のこゆきお大納言いふ家家うへりある人をとて  
あつたまはく珠のそとにもまは光あふ玉はあつたまは  
あつたまはく人よはあつたまはあつたまはあつたまは

○我家よ有と何の人を召集て、類本よを字にあつてめし、何のめ  
まは役補つ今家中と云く其屋敷の外よ住ても其仕一人と云  
に同ど○五色は光あふ玉は写本五色は光玉と何り上りハ写本は  
如く何は此ハ少しかつてまはよは○願ふことまはハ龍の首  
み玉を獻ふも賞よハ望願ふま更ゆもまはまは

あつたまはく<sup>よかせ</sup>仰のまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは  
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは  
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは

○但し此玉は此玉ハ凡玉と云物ハ得あつた物あるを珠ハ龍首  
秘もつむ玉ハいふとて取べきと仕人どもの甚難き更  
に思ふよしと諸共ハ大納言の前へ申あつた

大納言のいふ君のほろひいふまはあつたまはあつたまはあつたまは  
君は仰るまはかちあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは

○のまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは  
ハ凡例ハ○君のほろひいふ上<sup>蓬來玉</sup>ハ赫映姫をほろひと云る処  
委云き<sup>枝の段</sup>

子云し如く此も人と云字有るを同言重脱ハ誤脱しむるかとも  
思へや於人字脱しるるあはれかとも云はまことなり君字古板  
本類本てんしむハ誤なり○思ひけきと類本おもくハ誤なり  
此國ここのくにの海山うみやまよりは鈴木氏云たけの山のりよりのりハ海よりと云  
意なるべしと云はき或人云霖雨れんうなぐて山を崩し其洪水こうすいを乗  
大地の川を下りて海へ出ると龍りゅうを成と云又越中國射水郡奈古  
浦なご今放生なご人泉田某云過去い文化六年七月十一日其日朝より雨  
かきよおとせしむ

○此國の海山より鈴木氏云たけの山よりのりハ海よりと云  
意なるべしと云はき或人云霖雨なぐて山を崩し其洪水を乗  
大地の川を下りて海へ出ると龍を成と云又越中國射水郡奈古  
浦今放生人泉田某云過去文化六年七月十一日其日朝より雨

風烈ふうれつしあつとくう未いまむらりに少し晴つた沖の方ハ猶曇て薄墨  
みやゝぬるに中ちゆう殊じゆうに黒き雲一筋立登るる又下りて海面今  
一尺計いちせきよりりてハ上り下りす間ま波なみひびくと付るとし  
中ちゆうちのこ龍りゆうの形かたち又光ひかりひきまきつ上りしが後ハなごり  
ぬく空晴あかなりと云其地の翁ハ昔ハかゝる叟そう有るり龍りゆうの登る所  
と云り其ハ六月比ひ夕立ゆふだちい降ふる時ときも尾おの  
方半なつかとぬぐきより未いまほのみに見るとかづり又扶桑略記ニ  
法皇御記と寛平元年十月朔己未云即位之間自乾角山中黃龍騰  
天太宰少貳清原令望為壇大井灘使見之從五位下橘有棟參梅宮之



次見之舟波博士舟波有冬在彼國見之件三人慥見之往々見多也と  
有り○いゝ思てゝ大納言おれ武タケきよあせヤス易きヤス更マシと  
勵ゲあし催モウきキふフなナと○ちんぢチとト寫本シヤうウのノきんぢキとトをヲ沙サと  
云クニべきビ処トをヲきんぢキとト云クニとト蜻蛉トビ日記ニ子  
仕へ人ニちシ終リバ然カきキ宣シひヒすスしシのノ更マシなり

道綱卿の  
母お詞に見え

とトいハひヒしシ申マシやヤうウきキまマらラいイまマかカはハおオちチりリおオのノ仰オホセ事コトに  
とトいハひヒしシ求モトまマはハのノしシまマしシ大オホ納ノリ言コトのノ健タカくク嚴イカしシ心ココロをヲ  
らラえエのノしシまマしシ心ココロをヲおオのノしシまマしシ心ココロをヲおオのノしシまマしシ心ココロをヲ  
とトいハひヒしシ申マシやヤうウきキまマらラいイまマかカはハおオちチりリおオのノ仰オホセ事コトに  
とトいハひヒしシ申マシやヤうウきキまマらラいイまマかカはハおオちチりリおオのノ仰オホセ事コトに

○難き物なりと云は物字類本より更なるを宜し○

ハ大納言奉公の忠勤すべき道理を釋トクまマせセ仰オホセ給タマへヘむム為セム便カタ方カタお  
とト出デ立タすスとト申マシなり○大納言見笑ミエウラハシてテいハはハしシとト人ヒトもモ臆オソ病ヤメなナるルさサ  
はハなナのノらラ仰オホセ事コトをヲ蒙カケてテ然カらラバ玉取タマ子コ罷カらラぬヌとト申マシとト見ミえエ笑ウラハひヒとト次  
の詞コトをヲ述ツゆユふフなり鈴木氏云此段凡ツくク此大納言の健タカくク嚴イカしシ心ココロをヲ  
へヘとト談カシてテ與ヨとトせセるルもモはハなり大伴氏ハ先祖天忍日命アマノシロヒノミコトハ瓊ニギ杵ハ命ミコト高  
千穂チホ峯ミネ天降アメノまマりリ御供ミツケ子コ仕シへヘひヒしシより日臣命ヒノミコト神武天皇カムヤマト東  
征トウセイにニ從ツてテ功イササをヲ立タゆユひヒ世ヨにニ健タカきキ更マシをヲ以ヨリ御門ミカドをヲ守モリてテ仕シ奉ホウるル氏ウヂもモ天  
平勝宝元年の詔解二の卅九丁は出もモ大伴佐伯宿禰オホトモノサトウジノスネハハ海行ウミユキババみミづヅ屍カネ  
山行ヤマユキババ草クサのノ屍カネ王オウのノへヘとト死シなナめメぬヌはハ不フ死シとト云クニ來キるル人ヒトと  
なナもモ聞キ召メとト宣シひヒてテふフ更マシとト云クニりリ記傳十五キコト廿ニ万葉十マンヤフ  
八ヤチ廿ニ一イチ廿ニ五イ十ジュウ可考コカウ是コトらラのノ意イとト

〇見〜と云々〇わのむぢぢの下諸本字ありうハハ誤な  
 ら〜と云〜と鈴木氏一本字なきに從〜と云やと〜〇君  
 好は〜ハ大納言自己の御は〜人子宣ぬ言なきハ君字  
 ハ吾字を誤まる歟吾君互に誤る  
例万葉に多しと云置つれど是ハ凡そ世間の更  
 ら〜宣ぬよめて上り君のほ〜と云は〜を返し返  
 して再変〜宣ぬふなり故君と〜妨なし。按よ〜祖と云べき  
 と人の祖ふ子と云べきと人の子と云同例の言ふも〜〇  
 名とな〜しつハ名の普く通達して世人の能知〜と云今ハ名  
 と腐〜と云と同じ意を取〜悪名の立よ〜と云思ぬ〜  
 万葉卷二妹の名ハ千代子將流姫島おとむの小松末子おし苔山〜又

ハよ〜と云清き其名と奈我佐敏流ながきよを延云。續紀宣命解  
 五に官位乎賜利昌死利昌死波善名乎遠世波善名乎遠世流傳流傳天師云天師云ながの長とす  
 三代実録卷五子狹手彦再使海外征伐兩國子狹手彦再使海外征伐兩國絶域復立二國絶域復立二國身尊  
 當時功流後代當時功流後代後撰集雜四移々移々名子流〜河竹ハ何の世〜の  
 秋と知べき貫之集延幹の山返牙返牙に山返牙みことお〜〜君の名ハ天  
 川まで流〜貫之の高名と  
譽稱〜なり是ら皆善名ハ久〜傳〜廣く  
 知ら〜更と云。又源氏物語なるハ大方悪名ハ方子云。帚木卷  
 子加ら〜名と云流〜。明石卷子後世〜輕〜名と云流  
 し終〜思し乱〜ハ帚木お結なり。袖卷子〜名と云〜  
 〇龍の首は珠取〜

鈴木氏云今更かくいふもめぬと人笑をむと殊更もあはれ  
筆意なり○のままの抄本のいふふとまはるる

此人のよきこのかゝる舎ツケ殿のまゝにキタ強も強なす河ふ  
うぢりやういふさささささささ人にもほまやいふ  
さささささささささささささささささささささささ  
まささささささささささささささささささささささ

○道の糧食物カテは此コ字ハ料レウと云意なり糧の更ハ上玉枝の段ノ云ま  
かても食物も同物なると例の重云と○絹綿キヌ銭ゼンなすハ即食物の料  
なり昔ハ金錢カネなすも絹綿キヌなすも物の價アタとせしなり殿の内は  
有限出し尽しぬハ此更コハ物借モノとさささ玉取タマハ行者ヤクども

悦トクづくトクまなり○取出トクて添ソフてハ抄本コ取クいてソフてソフ添ソフて  
を脱トクちりトク寄ヨスと云コ同トクく玉取タマに出イる人ヤクハ與タカひタカなり○  
此人コどもハ類本コ人コども○いコとコと我コハさコまコ大  
納言龍コの玉取得コへコ願コなコ立コひコ身コを慎コと精進コとておコひコ  
なりいコぬハ齋居イヒ約コ轉コのコなるコ忠コとコ卷コハ忠コとコのコ父  
歎コぬハ更コも知コぬコ只コいコぬ精進コとコ忠コとコ相見コすと  
ひコて行コひコハ大和物語コハ良少將コとコ尋コるコ處コハ妻子コどもハ更コもいコふコ  
ぬとて世中の神佛コハ願コと立コまコ音コもコまコ○家コハ歸  
とぬハ君コの爲コハ命コと捨コとコ同意コなり○のコまコまコけコとハ  
抄本コよりコ○おコのコ仰承コとコ罷コとコ皆コ旅立コしコるコなり写



ハ此きてハ好色と云ふ。小世継物語平仲本院侍後子係想す。如く

すきもの云はる人なれば。帚木巻スキトかふ好スキト叟ども。末世に

聞傳へく。下の叟ハ例の叟哉の意なり。○そを何なりハ靈異記

ハ訕ソシ字鏡ハ警ハ。茲此反上毀量也。嗤シ。同克之子之。二反戲也。阿本

々何ぞ其人け上を思アツきぬハ云なり。○賜タマフをきつる物ハハ与ユふる君

の方ハ附て云る詞なり。類本ハふるまハつハせハ何なり。○各々分カクつハせ

。ハ諸本ハ々々何れど今ハ抄本ハ後つ。此言下ハ續ハ意ハめハ家ハに

籠カゴ居行カまハきハ処ハへハいハぬハ云ハ係ケまりて字何れハ能聞カせハと無

ても宜し。○或ハ家ハこハもハ居マるハ人ハの前ハめてハ足ハの向ハふハ方ハへ

いハあハんと云ハつハれハどハやハとも龍首ハの玉ハ取得ハまハきハと知ハて隠カめてハ已

が家ハ居マるハ者ハもハあり又自ハ行マくハ思ハふ物詣ハ々々も為セるハ龍

首ハ玉ハ々々々ハ絶ツくハ不レ思ハ由ハなり。○親オヤ君ハと申ハともハ親ハるハ孝ハと

尽ハし君ハるハ忠ハを勤ハへハれハ云ハ二ハと一ハハハ挙ハるハ詞ハなり。國讓下卷

に仲忠仲忠北方産仲忠のハ惱重仲忠と仲仲忠。かハんハのハ押ハ。母仲忠。目ハもハこハと二ハ何れハ一所ハと

親ハ君ハと頼ハもハるハ我ハ子ハハハわハるハかハくハハハ宣ハふハ。懷風藻河島皇に忘ハ私

好ハ而ハ奉ハ公ハ者ハ忠臣ハ之ハ雅ハ叟ハ背ハ君ハ親ハ而厚交ハ者ハ悖德ハ之ハ流耳ハ。公羊傳子傳ハ君親

無將ハ。是ハら君ハと親ハと一ハハハ云ハるハ例ハなり。○かハくハはハきハなハれハ叟ハを仰ハめハよハこ

と云ハハ頭書ハはハきハなハまハきハハ無ハ便ハ宜ハなり遊仙屈ハハ方便ハをツキハクハシ

と云ハの表裏ハなりと云ハ。古今集誹ハ相見ハあハく星ハハ数ハあハく有ハれハの

ら人ハにハはハきハなハれハと云ハふハはハこハすハれハ。此歌ハハ恋人ハハ云ハ依ハづハきハめハつハきハな

き由なり此も龍の住所ハつづこ其玉ハ云くして取て云方便  
 もぬくやとも爲得つづこも更と仰みよ更哉君親ハ命を捨て  
 も仕てハ云と親もあは君もあは余なる更と仰みよ更哉  
 と訕あふなり○事ゆるぬもあは其更の不調も俗に埒ノ  
 アカ又と云意あつるはしし六条御息所 柳卷暁別の如く 更ちち御心惑父の借る物を貸る人  
 中く更もゆるぬもや沙石集の子返はを受処 度々問答  
 往復して更ゆるぬもけとばくもなりとのち急ハ類本よとの二字  
 ちし古今集秋子 秋ちと逢こつちよ女郎花天は河原よおひぬ  
 もぬゆえと師をハエテ有テモナイニふが秋よあは物故女郎花な  
 る色よ出くすはひつるふを誰カ飽タト云秋テモナイニと訳さ

程ふるさたハ此も連モ調へキ更テモ死ニ依テと云ちるはし  
 かなや姫すまひハ係のあはハ見ましとのいすひくすま  
 らハ屋をばはしりひひは深なるを箱をいすハ  
 ひく屋はよハいすは深なるをいすハ  
 らひハいすはあは深なるをいすハ  
 にすはあは

○赫映姫すまハハかや姫ハ世ハ類ち清らた屋の内さ  
 へ光のやや女もは常並の御殿あは附くしハ新ハ普  
 請として屋を構めなかり何て官卷よ治部卿の主何て官は御爲  
 とて家を造て調度を設て心一よ吉日を取て御迎にとて

記の八尋殿の傳ト古妻問するハ先其屋と建し更と見ク云と  
云流ツ此ハ甚古きモ河ノ妻迎マ態と屋造す。當  
時の例ハ○例のやハ抄本の字ナ按にハの下テ字を漏せ  
有ベ○屋ハ御殿ナ抄本ハ家ト作ルハ悪シ家と屋との差別ハ  
漆ヲ御殿ナ抄本ハ家ト作ルハ悪シ荏野冊子ハ委云○  
字ハ除ツ伊勢物語七段ト昔ヲ刻ク時絵ノ形ハ此ハ致ヲ著ク或  
人ハ隨筆ニ兩山墨談ヲ云ク時絵ノ法ハ倭國ヲ出ツ宣德年  
中楊某ト云者ヲ倭國ヲ遣ス其法ヲ傳フ其子楊墳ト習ク  
自新意ヲ出シ五色金鈿ヲ以テ並ニ施ス○いろハ  
抄本ヲ區シ古板本ニ校本壁ト作類本ト此言ハ普本  
ハ時絵ト字ナ頭書ヲ色字ノ誤致ト云フよ

まハの誤ミいろハの誤リ又本ト作ル  
みハ脱スいろハと誤ス猶此ハ更ハ上  
九ノ云フ可考ト兩山墨談ヲ五色金鈿ト云フ如ク此ハ彩色ハ  
時絵ノ又尋常ノ丹青ヲ施ス時絵ノ知ガ○屋ハ上リ系ヲ  
と以テ善美ト盡スなり系ト○屋ハ上リ系ヲ  
德天皇神護景雲元年四月癸巳東院玉殿新成群臣畢命其殿ヲ普ニ以テ琉  
璃ノ瓦ヲ畫シ藻績ノ文ヲ時ハ人謂フ之ヲ玉殿ト遊仙屈ニ金臺銀闕ノ日  
干雲ニ水精浮柱ノ的皦含星ノ雲母飭窓ノ玲瓏映日ノ長廊ノ四注爭施ノ玳瑁ノ之  
椽ノ高閣ノ三重ノ悉用ノ瑠璃ノ之瓦ノ白銀ノ為壁ノ照曜ノ於魚鱗ノ碧玉ノ綠陸ノ參差ノ於鴈  
齒ノ云フ似ク○色ハ字本ヲ從フ字ヲ補フ○内ノ

さうして以上を外の構と云以下の内を構と云ふなり○云  
はるゝあゝぬまゝ此殿は張ひつふ綾織物の尋常ぬまを所て云  
ふも云はぬ甚よ此品なるよしぬり○間毎は張ふりハ抄本は字な  
し校おさけりよと何ハ誤なり間ハ今も何の間とれの間など云間  
ちり

さうしてあゝぬまゝ此殿は張ひつふ綾織物の尋常ぬまを所て云  
ふも云はぬ甚よ此品なるよしぬり○間毎は張ふりハ抄本は字な  
し校おさけりよと何ハ誤なり間ハ今も何の間とれの間など云間  
ちり

○さうして妻どもハ下離れしもれ上と云更何り此ハ其離  
縁は更々此本は妻どもと云即上北方又妾をさくく如此なる  
しと云はるゝぬと赫映姫に比べハ物の数もあゝぬよしとく

大納言は心よ成てかく无禮しハ書るなるはさして此下必詞脱  
く文言はぐうの故○さうしてさうしてと云ると今補つ此は能似  
るも更藤原君巻上野官源正頼の九君何て官を  
恋く聲になくまるとさうして処唯今世に何の上  
達部さうして此殿の聲よ成を今更に我をんんとて妻をも追  
さうして今左大将正頼は家子往々我住らんよ更の人あゝハ思疎に  
なまゝ宣ひく待みりさうして宇治拾遺卷に三河入道おぼ俗  
四より在るよときと  
は妻をばさるり若く容カキりぬ女子思附て其を妻ユラみくはるゝ效  
ひもさうしてあゝぬまゝ後て上り皆と云言を加く補つ○かや姫  
と云此を字よと云べきこの如く聞かめり是ハ古と今と人の物云ふ  
は別異なるもて古今集の詞書に隆坂もて人をさうしてさうして時と音





と讀まむ是ハ皇子なれど臣其仕ふるさま甚親きを思へし。宇治

拾遺卷に下野武正と云舎人法性寺殿三候り又十筑紫三太夫貞

重と申者まなり貞重三舎人三仕へり三と云三候三り三又三筑紫三太夫貞

重三と申者まなり貞重三舎人三仕へり三と云三候三り三又三筑紫三太夫貞

重三と申者まなり貞重三舎人三仕へり三と云三候三り三又三筑紫三太夫貞

院宮雜事中御隨身勤夜行召繼奏時今案親王家又召繼あり式部

卿重明親王嫁娶の召繼已下錢二万と祿賜ふ李部王

記又つりはと初花卷花山院御車大童子四十人中童子

廿人召繼とはとやの俗と仕あり著聞集卷承安五年競

賞しけ公景ハ元より院の召次所は候り孰景歎感の餘に次日召

次所は候へき仰下き終らる拾芥抄中院司部に召次所あり又

柏木卷は廳に召次所ありと宇治拾遺卷侍田舎より上て主近

めしはり侍出來り御出居へ參らる云けは悦て參りけ

己此召つぎつる侍とし候くを終へる云くはり鈴木氏ハ

はきハ給なりと云終まり召繼の字義なりする○やりきひひハ

御供人を省略し出立せゆ由なり他より云ハやりき自云ハハ

つしと云此ハ地と他より云言なり若紫卷源君北山ハ御供に

睦まじき四五人計と誰ともともを終へる云くはり御供に

のしき人住まる所とあらはる餘やりける哉き

もこそすれども宣ひふらり。源註拾遺葵に襪ソウとやつゝと訓コトを  
 バ衣より出るゝ詞ある。一、字書に襪ソウ盧甘切。音藍襪ソウカ主切音縷ル。  
 玉篇衣壞也。揚子方言南楚凡人貧衣被醜弊或謂之襪ソウ裂或謂之襪ソウ縷。  
 何り神代紀に火酢芥命日以襪ソウ縷而憂之曰吾已貧矣乃歸伏於茅  
 中訓コト○難波に邊シは邊字ほとと訓コトと寫本にヘンと讀ク  
 るを惡し○大伴大納言に人やハ大伴のと訓コト一類本寫本に大納  
 言に下殿字は終ニも凡ニ名下殿とつゝぬ例なきは今ハなびニ従  
 つ。此や字下なるト重カタていつク聞ゆより上ハ大納言人ニや其ニ  
 の首に玉と終ニと結ニ上ハ此更慥ニなる疑ニの意と以問ひ下  
 ハ受ニ直ニ聞ニや如何ニと宣ひニやニ結ニ言ニ

○やニすニに彼舍人ニ令問トみニたり○船人答ニいニ云ニ  
 龍ヲ殺スなニ云ニ更思ニよニび甚怪ニ有ス同更哉ニ更ニ有  
 べニ是ハ決テ本性ノ人トあニ狂氣ニんニやあニ思ニひニ笑  
 然カやニのニ船ト答ニりニ

船人答ニいニ云ニ  
 龍ヲ殺スなニ云ニ更思ニよニび甚怪ニ有ス同更哉ニ更ニ有  
 べニ是ハ決テ本性ノ人トあニ狂氣ニんニやあニ思ニひニ笑  
 然カやニのニ船ト答ニりニ

○船人龍と甚かと思ふ



ちりちりも同じ。著聞集十の大納言泰通御狐狩  
七の処は古狐の言は若くさうふやの  
 ばくは此御氣色のや申含さうひなびいりてぞ懲ツリ傳ツリ候べ  
 まりあり。此ニ悪ニ宣ニふなり。○海ウミ毎コトは紀伊の海土佐の海ちと  
 所々に名の変カはかか云る形なり。龍リウハ不居キヌの龍と見付ハ殺して玉  
 ちりちり構て所々方々尋求ソウキウゆなり。○筑紫ツクシの方マは漸シに漕  
 行つて遠くははは方々ハ到キるなり。

ころころと風起雲立ち何故なまを怪しむなり。○早  
 風吹てハ抄本テ字ナシ早ハヤと云くと剛ツヨき意イ通トウハ別ワケハ  
荏野冊子  
 云ク○世界セカイと云てハ暴風吹起ヒ黒雲急ヒ覆フク四方シヨウ八面ハツメン皆  
ノ聞クりありあり。大鏡オホキョウハノ後ノチ加茂カモ大神物宣オホノミツノ処トコロに霧  
 立ち世間セカイと云りて東西トウシもわづらひ暮クいぬるや覺オシるト著  
 聞集オキミ十ト物モノ逢ア逢ア処トコロに日暮ヒノクて世中セナカと云クハ同トウシ。伊勢集イセの  
長根枝エダの  
 うとちのいと訓ノべ今イマも沖中オキナカと云クハ同トウシ。伊勢集イセの  
 る雲クモ舟フネぶぶななりりききばば世セとと云クハ誰タレううややハハ○ややと  
 出デぬぬハハ寫本シヤホンは役ヤクの諸本シヨホン入イぬぬと云クハ惡アクし上ウヘ  
玉枝の段ノも海中ウミナカ

ころころと風起雲立ち何故なまを怪しむなり。○早

ころころと風起雲立ち何故なまを怪しむなり。○早  
 風吹てハ抄本テ字ナシ早ハヤと云くと剛ツヨき意イ通トウハ別ワケハ  
荏野冊子  
 云ク○世界セカイと云てハ暴風吹起ヒ黒雲急ヒ覆フク四方シヨウ八面ハツメン皆  
ノ聞クりありあり。大鏡オホキョウハノ後ノチ加茂カモ大神物宣オホノミツノ処トコロに霧  
 立ち世間セカイと云りて東西トウシもわづらひ暮クいぬるや覺オシるト著  
 聞集オキミ十ト物モノ逢ア逢ア処トコロに日暮ヒノクて世中セナカと云クハ同トウシ。伊勢集イセの  
長根枝エダの  
 うとちのいと訓ノべ今イマも沖中オキナカと云クハ同トウシ。伊勢集イセの  
 る雲クモ舟フネぶぶななりりききばば世セとと云クハ誰タレううややハハ○ややと  
 出デぬぬハハ寫本シヤホンは役ヤクの諸本シヨホン入イぬぬと云クハ惡アクし上ウヘ  
玉枝の段ノも海中ウミナカ

よ出く云我國の内を離てと皇國を遠く大洋の方を吹廻しけり  
 漸くは出行を云とまりと皇國を離出る由なり○波ハ船ヲ打  
 かけつゝまじいれハ舟を沈めんゝ波を打掛て渦卷入やり  
 ○神ハ落かゝふやりにひらめきあつゝ明石卷ヲ  
須ノ天波  
須ノ天波  
 其音何しき更巖も山も残すゝ氣色なり神の鳴ひゝめくさる更  
 子云ふ方ちて落かゝりぬとぞ不申るゝ何る限さや一人ちし  
 と何り神ハ雷なり和名抄子兼名苑云雷公一名雷師  
カ回反和名一  
伊加豆知  
 云霹靂辟塵ニ反俗云加美於豆一云加美止介  
さて彼舟皇國を遠く離て海中に吹出し  
 波打掛て海底に入ぬはく上よりハ雷落めんとぬべく三を以て追  
追  
 責る由なり然ハ上の海中に入ぬべくハ出ぬべくの誤古今集  
みく入くくハ卷入の徒子重なるを思べし

俳子枕よを跡より恋れ責來は為センカタナ便方无と床中に居ると歌  
 諧に似るなり浪ハ云神ハ云大納言ハ云とハ字を重なるハ同集秋下  
 ハ來ぬ紅葉ハ宿子降敷ぬ道踏分て訪人ハちしとハ字に同じ須  
 磨卷上巳撰の処にるはるに風吹出く空もかきまぬ海面ハ雲を張  
 るとや光満て雷鳴ひゝめ落めぬ心ちて辛くして  
 どり來るかふぬハ云もかて世ハ尽ぬるやと心  
 細く思惑と云ハ此も能似るなり此物語を思て書るはるべし○  
 ぬぐしめハ云ハ字古本より引る須ノ卷かゝるぬハ  
と何  
と何  
 支子隨て改つ諸本めと何り○いのちとすゝとほるぞとのよ  
 ふハ風ハ遠く大洋を吹出し浪ハ舟を沈め入せし雷ハ落かゝり



海底に沈没シラミルくは脱トモりたりとも上より雷落ライラクりてぬはしりなり○  
神の助タメあはばハ雷の落かゝるを更と諸の神に御助に依り脱トモるは南  
海に到トキぬるまとなり○南海トシカイハ字音に呼トべし中ナカの字ある本ハ悪  
し前件マゼハ海中に出デねばくと云る是なり御舟南方に進マりて南海  
に到トキぬるしき國クニに著ツキてしや申マウて左ヒダリも右ミダリても死シ更マに脱トモるまや  
ぬしとて泣ナクなり南海國ナニカイクニに甚シく畏オソるべきとしハ首卷クニ九クに載マりてを  
可考コカウ○字ジのて何ナニの古更記コマシキハ須佐男命スサノヲノミコの  
悪業アクギヤハ更マを猶ナホ其キ惡態アクガイ不止トモ而轉マシりて何  
る傳ツタは是ハ本ホンより有ア更マの愈進ユイシンて殊マに甚シくなると云言イハなり万葉  
十トに何時ナニトキもなほ不慮フコ有アり何ナニの縁ヰども得ウケ田直比來タナシヒライ恋コイの繁シきハ轉マシ  
字ジを書カハ轉マシり進マシる意イを取トルなるとし書紀シキに武烈天皇ムリキテノミカド御所ミヤノ行ユクと云言イハ所

に設ウツテ奇偉キイ之ノ戯ウツなり何ナニの右ミダリの意イより何ナニの平穩ヘイエンハ尋常ジンジョウなり何ナニ  
奇僻キヒクく音ネのりぬ意イときく貫クニ之ノ集ツミハ蟻通アリトウ神カミの更マとて何ナニの神  
なりと云るは是なりと云はる此コノも其キ奇偉キイより何ナニの態ガイハ何ナニの君キミ  
仕シへくと申マウ意イあり○すむるなるハ伊勢物語イセノモノガタリ 宇津ウツの  
道ミチハ甚シ闇ク細ホソきに葛クヰ葛クヰハ繁シきと物心モノココロ細ホソくすむるぬ目メと見る  
更マと思オモふはとを縣居翁ケンイニウ云イハすむるハとて同ドウとて此コノハ思オモかけ  
ぬ辛ツラみの見ミる云イハ意イなり文選モンゼンの註シュに坐スロ者モノ无ム故辭コトバと云イハ又マタ不慮フコ不覺フカクお  
ど心得ココロエハ皆みな叶カナつと頭書カウシ 今イマも心ココロも心ココロなり浮ウるさまはさむる  
云イハり同ドウと云イハはる新釈シンセツの說セツ 猶ナホ足タラシ立タテ稻直イナナシの說セツ 紫式部ムラサキシキブ日ヒ  
に世ヨに常トコなりぬ死シやとす更マのりて泣ナクなり○と云言イハすむるは



ふ哉ハ万葉六にいさなありウミ海哉死為流山哉死為流死許曾海ハ潮  
 干て山ハ枯イ伊勢集式部卿官亡みひく御四十九日終る家子罷る人君よままはらな  
 きまるや我ハまままこひ返す命命あるゆハ亭子院歌合人恋と  
 はらなまはらなまを我やもま身はあらなま後も相見あらなり○撒  
 取あらな今不慮命命を亡しむまと悲めらなり此楫取あらなくと書る  
 筆勢いとまのいて笑を止らなまがい

大納言いはまままこひ返す命命あるゆハ亭子院歌合人恋と  
 はらなまはらなまを我やもま身はあらなま後も相見あらなり○撒  
 取あらな今不慮命命を亡しむまと悲めらなり此楫取あらなくと書る  
 筆勢いとまのいて笑を止らなまがい

○楫取の申いはまままこひ返す命命あるゆハ亭子院歌合人恋と  
 はらなまはらなまを我やもま身はあらなま後も相見あらなり○撒  
 取あらな今不慮命命を亡しむまと悲めらなり此楫取あらなくと書る  
 筆勢いとまのいて笑を止らなまがい

ちまままこひ返す命命あるゆハ亭子院歌合人恋と  
 はらなまはらなまを我やもま身はあらなま後も相見あらなり○撒  
 取あらな今不慮命命を亡しむまと悲めらなり此楫取あらなくと書る  
 筆勢いとまのいて笑を止らなまがい

類本は後二三字加つ〇青へをけきて和名抄子病源論云胃氣

逆則歐吐上、茶后反字亦作嘔皇極紀四年入鹿、臣を斬時子麻呂等以水送飯

恐而反吐神の段、金山彦にく多具理とあり谷川氏云へぞ、反

吐の音なり鈴木氏云あをへぞと云ハ今俗黄水と云く舟輿ワスネに酔る

者其吐物なりと云然き宇治拾遺十に門部府生五に後者黄水とけき

合ふりく

かきくまを答へてはしに神あゝ絲を何もまはのしにりまに  
よみかきくまを答へてはしに神あゝ絲を何もまはのしにりまに  
よみかきくまを答へてはしに神あゝ絲を何もまはのしにりまに  
よみかきくまを答へてはしに神あゝ絲を何もまはのしにりまに  
よみかきくまを答へてはしに神あゝ絲を何もまはのしにりまに

〇神あゝねむハ鈴木氏云按是ハ大納言れなきかゝハ憑めけ  
りくハ云と宣ふと受て揖取我身神あゝ絲ハ何態と何仕まへん  
我を憑あゝよりハ早神を祈ひへ申るへしてハ仕ツケテ云言ん  
附々々聞あと云けき〇何とぞとを仕まへりく風吹波烈しけ速  
ぞゆハ上カ反る語格も風波烈しけりも神あゝね身なほハ如何  
に〜との止トムへと申なりと越中人弘中重義云古今集春歌子雲  
林院の御子け許り花見北山は邊常ハ北山罷りける時雪林院の御子  
の御許利仁將軍或五位ノ暮預宇治拾遺卷に利仁と云ゆり御食と云ゆりに利仁來て云やい  
ぎ々きりへ湯浴ユヲミ太夫殿としど太夫どの湯浴など前後誘云  
るも同格なり〇神さへいふまに落るるふやけりハ龍とこけ

さとさといふ下子龍ハ鳴雷ヲ類ル有ル其ノ思合ハべし。詩  
 天昏地黒蛟龍移雷驚電擊雌雄隨ハ何リいふまハ和名抄子頂  
 顛陸詞曰顛天反訓伊頂也顛音頭上也○求ルひまふらへん此ハひひ  
 候ト云コトいふし詞を終へル例ア事ナリ宇治拾遺卷一鬼ノ酒宴  
 候ニ云コト目鼻ハ之ハ此ノ瘡ハ許シまし候ク又卷三鳥羽僧正國俊ト戯  
 條出させぬ候ハつまり於此ノ物語沙石集卷六莊嚴坊法印子答孫鎌倉右大臣  
 此ノ詞世間ノ様ハ一人ハ悦べざらず一人ハ歎く更アリ今ハいふひな  
 さしいふ但シ仰ぎぶらぬト思ひまし候ク是ハ兼らり  
 ぬらぬトあま○かくあらむトハ校本ニ從つかく二字補ひあらむナリ  
 とあらむ字と除つ類本ヲ求ル故ヲあらむナリとあらむハ惡し此ノ詞ハ

如此有也カクアヒナリ音便ヲあらむト訓べし下狩行幸段山本チらしなり  
 何レ頭書ニあらむハ海ヲ荒るを云ふト云ふハあらむト○もやても  
 龍ノふらぬハ和名抄子史記云暴風雷雨漢語抄云八夜知又乃和木乃  
 加ハ雲御抄ヲちちハ海神ノふらぬス風ナリトハ此文ヲ依ル  
 風ハ志しもちも云又チと通スてト云例追風をあらむト  
 云コトいふし詞を終へル例ア事ナリ宇治拾遺卷一鬼ノ酒宴  
 候ニ云コト目鼻ハ之ハ此ノ瘡ハ許シまし候ク又卷三鳥羽僧正國俊ト戯  
 條出させぬ候ハつまり於此ノ物語沙石集卷六莊嚴坊法印子答孫鎌倉右大臣  
 此ノ詞世間ノ様ハ一人ハ悦べざらず一人ハ歎く更アリ今ハいふひな  
 さしいふ但シ仰ぎぶらぬト思ひまし候ク是ハ兼らり  
 ぬらぬトあま○かくあらむトハ校本ニ從つかく二字補ひあらむナリ  
 とあらむ字と除つ類本ヲ求ル故ヲあらむナリとあらむハ惡し此ノ詞ハ

ちまやみぬ少あうりて風ハ狂くや〜

○とびこやちり〜ハ諾ノへふ由と答る言ちり上妻同の段ノ例を引

○撮取ハ御神ハ土佐日記正月廿六日の条に手向する所あり揖取

幣奉らば幣東へち終バ揖取の申て奉る〜ハ此幣の散方

御船速ヲ漕しぬゆ申て奉るとあり按今世船靈神此更ハ荏野冊

子子と申て揖取の祭まる神あり古〜ハ如此更有る船カ、ル、トハ祈ハ

あひと揖取子せきする更め〜やめけ若然ち〜ハ此も揖取の祭

流る御神と宣ゆふ意もやして此ハ揖取ハ風波あり〜と船の更に

のこ加げ〜ひ〜祈ま〜ま暫ヒ隙ヒづヒなヒるヒもバ大納言ハ祈し

ふ由なる〜○とびこやちり〜ハ音た〜と〜た〜投本念ち〜ぬ〜

本居翁云皆をぢり〜と字誤まるなりと云遣キは〜子後〜改つ古

事記獲栗宮段に於る〜と表ヒ隆那美許曾す〜か〜け〜傳ヒを

ぢら〜ハ拙省なり續紀州詔乃先乃人彼謀平ヒ屋奈之我カ能久都与

久謀天必得天念天雄畧紀子舍人性懦弱縁樹失色フ怯ヒ欽明紀

に微弱ヲなり〜何り拙愚ハなる意弱キ意ナど兼ル〜言ナり〜此ハ拙

愚なる由あり○心を〜ハ心ハ至深ク〜ぬ〜長無キなり幼少

と云も同し此言上と大方同意なるを例の重クなる夫木抄九雜ノ

ふ附の於〜の下ニ住スる心を〜ぬキ身をい〜きハ蜻蛉

日記解環中ハ四ノま〜心を〜ぬ〜何り○毛ハ末一〜

ハみ未抄本ノあしすヒとすヒ〜本ハ誤なり○動ハ〜

障らじと云程の更なるはこゆる〜動かしと云るなり○よ〜  
ハ吉詞ヨコト〜轉ウツリ祝詞イハヒに更となれども鈴木氏云終る祝詞式イハヒに出雲  
國造の神賀吉詞カキノヨコト台記宇治左大臣頼長公記の康治元年大嘗會別記  
に中臣壽詞ユコトを載ら終るり谷川氏云古書コキに禱祈賀壽タラキガシメ字をほき  
を訓又神代紀カムヤマトに咒祝シユシユクシユ壽字をほきよむ咒祝シユシユクシユ通して善惡ツキに就  
く云辞コトなりさ終る天神アマノカミの天稚彦アメノヒコを咒ホキ以惡心射者則當遭害マシコリナシ以平  
心射者則當無恙サキクアラズと宣イハひつりと云。即此も雷鳴風波を止ヤひへと祈  
ひふ詔ミコトノコトの詞コトなり○も亦ちてハ聲コエと惜オシまひ喚コヒシ立る由なるも嵯我院サガノ卷  
平中納言の上野官ノノ日比ヒ〜上野官ノノ大オホに驚オドロクひひ〜彼カノよ〜つきの  
訪ウラガぬぬハいろよと問トひて〜朝臣アサノミいぢ〜申ウタガひ更マシと〜声コエを放ハす宣イハふ時トキよ〜  
何ナニて宮ミヤを慕オモひよ不叶と心得ひひ

續古事談ナ上ノに後三条天皇の御前ミマに大オホ殿座ノミを起オり出デさせ終ハり  
とて大オホ聲コエを放ハす宣イハひ〜く〜多オホうと○立居タチイハ神カミを拜ウガひ終ハり形カタ  
あり大神宮儀式帳オホノミヤノギシキチヤウに四段拜奉ヨシロ短手二段拍ウチ一段拜又更四段拜奉  
短手二段拍ウチ一段拜奉畢ハヒ〜〜り終神拜の更ハ記傳書紀ヨミの私  
記シ謂イハ拜ウガ爲ナ乎加無言カムコト乎禮加レ無也ナシ〜〜り起居折屈オキイマシな〜〜挑チカ華  
葉ハに女房神拜メノミヤノカミ兩段再拜フタヘノカミ乍居四度禮オチイマシ之ノ〜〜り終ハり男オトハ起居オキイマシするを  
知シ〜。此コノハ祝詞イハヒも千度計チノドケイ申ウタガひな終ハり拜ウガひの數カズも限カなく多オホうるは  
〜○千度計チノドケイ申ウタガひふけりやあ〜んけケハか〜と云言イハの約カケ〜〜に〜故ユヅ  
〜と云意イハなり。落凹物語オチウチノモノガト卷マク源大納言タケノオホノノリ病ヤメの処トコロに定業サダノノリ命ノミも〜延ノボび〜  
人ヒトも願イハ立タ〜んけりやあ〜ん少オホ〜怠オシて云。明石卷アカシノマキに朱雀院スズメノリノの御夢ミユメ





し増く女ハ舟底ヲ頭と衝當て糸をひききき又二月六日の条、舟酔の淡路島の巨子都近く成ぬ云と悦て舟底より頭をもつげて、舟の中まゝの病者其形状なり

松原の明石に濱のなり南海なるぬ更を示す、濱邊に假し庭を敷設く強て舟より下し奉げ、其時より起上り、南海より何れなり、始上のそれ結

る、何れなり、思し、諸本悉り、何れ故思へ、此一句限の結なり、かして今漸実を知り安心して起し、如何、詞なり、當時の詞遣ひ、此大納言ハ風を引け、毎に重く悩む、御本性ぞ、云義なり、大鏡

卷一、三條天皇、本よ、御風重く、於て、宇治拾遺十に冬嗣公、二、敷実と、訪、僧申や、風や、は、醫師申、隨て、蒜を食て候なり、又、増賀、年より、て、風重く成て、著、大納言宗俊卿、殊、風病、人、竹の柄、紙を巻て、遣、病源論、風邪、腹、目、李、附、病源論、風邪、寒熱、毒氣、客、經絡、使、血、決、不通、壅結、皆成腫也、心煩、而、嘔、逆、氣急





靈異記中に申ル字鏡子喉シ詩伊反出氣息心申吟也惠申シ舒神  
也歎也左方与落凹物語卷二兵部少輔後那久又佐麻与夫又奈介久文や歌みひを  
不又奈介久行宇治拾遺卷六僧加多鬼國へ一の隔あり内を見人多くあ  
る。或ハ死或ハ尔よふ声に又十三慈覚大師ウレ後の方に一宅あり寄  
る。きけバ人みうめく声あり又異所をきけバ同じくふふ  
声い腰輿を乗たのうちつつ荷たれて京の御家  
に歸りふなり○いらるる聞はむは甚く人目を忍て歸りひし由を  
知らるる詞なり○はらるる男どもハ玉取り出しひし男共  
なる○玉を得らるるしのバなむむのへえおぬぬりし抄  
本に從つ古板本になんてん寫本に南殿類本に南海など誤り下

れえ字ハ類本ハハなしなむハどと同辭も結もぞの格も同じ故  
み下としと結らるるのバなむと續らるる例夕貌卷右近夕良君の  
誠に海士の子ありもさむらりも思ふをとつて隔りひしのバな  
まつらりしのゆき須磨卷夜更しのバなむ例の不思お  
るるやみがしなしつるもも知し○玉の取がつま更を  
ハ大納言御自玉取り物しひて玉の易く取得まじま更を能知り  
ひやけバもり○かんだうハ勘當ハ字音なり今世オシカリと云  
程の更なり俊隆卷若小君失於大殿ハ兵衛佐君小君をいと  
いからる御前馬添の男もハかんぶらきけ舍人  
雑色ハ打さるる落凹物語卷一三日夜物語ハいつてかく濡きせぬ



蛇為八段、每段成雷、總為八雷、飛躍昇天、す、雄略紀、七年、天皇詔、少子  
 部、連、螺、贏、曰、朕欲見三諸岳神之形、汝齊力過人、自行捉來、螺、贏、答曰、試  
 往捉之、乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇、天皇不齋戒、其雷、モロキ、應、應、目、精、赫  
 赫、天皇畏、蔽、目、不見、却入殿中、使放於岳、仍改賜名為雷、と、く、つ、る、を  
 靈異記、上卷、初条、に、ハ、天皇勅、栖、輕、而、詔、汝、鳴、雷、奉、請、之、耶、其、落、處、今、呼、雷、  
 岳、云、く、り、て、蛇、の、変、な、し、蛇、ハ、龍、ノ、化、ト、云、物、な、ら、ば、是、等、も、縁、あ、る、変  
 々、々、々、〇、其、の、玉、を、抄、本、を、字、な、し、〇、か、い、き、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 本、な、字、那、し、か、い、ハ、害、字、ハ、音、な、り、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
御覽、じ、な、ど、の、如、く  
 字、音、ハ、云、習、〜、言、な、り、字、書、ハ、害、何、蓋、切、利、害、之、對、又、殘、也、禍、也、と、何  
 こ、俊、陰、卷、右、大、將、北、山、の、空、ノ、琴、檀、特、山、ノ、入、り、ハ、か、ハ、お、お、獸、ノ、施  
音、と、求、て、入、り、ハ、處、に

ず、身、の、を、獸、が、ら、れ、心、な、の、や、と、見、ぬ、ゆ、〜、御、馬、を、支、打、入、ぬ、  
 む、又、仲、忠、切、て、空、ノ、住、と、京、ノ、誘、ふ、よ、ふ、處、に、今日、の、獸、み、さ、よ、ハ、堪、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
云、京、ノ、誘、み、ハ、か、〜、〜、物、ノ、害、せ、〜、〜、ぬ、〜、人、ノ、苦、擧、レ、取、難、き、物、ナ、リ  
 〇、宣、へ、〜、〜、〜、〇、〜、〜、〜、〜、ハ、若、干、ハ、字、を、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 〇、訓、と、數、多、を、凡、ハ、云、言、〜、〜、〜、〜、と、云、ハ、同、し、〇、又、〜、〜、〜、〜、ハ、  
 俗、ハ、も、か、〜、云、と、異、更、ナレ、な、し、必、定、決、定、な、し、云、音、な、り、〇、我、ハ、害、を、〜、  
 ち、の、よ、し、ハ、假、令、汝、も、龍、を、取、〜、我、ハ、其、龍、捉、ぬ、根、元、ち、れ、バ、必、定、  
 我、を、恨、て、害、を、ち、の、よ、し、〜、〜、〜、〜、〇、能、や、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
 に、や、〜、〜、〜、〜、〜、龍、を、殺、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、返、す、〜、  
 可、笑、〜、〜、〜、〜、  
ラ、カ

かゝるひさしにむねの人のあはれ人なるをいふに  
あはれなりだまふをいふにむねのあはれに  
すしにむねのあはれにむねのあはれにむねのあはれに

○大盗人奴のハ大納言赫映姫の取得すし物とゆふしと云る

と悪く宣ふなむ藤原君巻滋野宰相あて官よりひ文と参ら

て取次とある女此女よハ盗人なりいふて汝ハ右大将主の娘ハ

文とて姫の文ハもて詣來る落凹物語女君と盗北方何と云

盗人のかゝ人もなき時を見付てあはれなりぬと〇人を殺さ

すして龍ハ殺さむと却て龍を殺さむと死害を

むむむむより彼女ハ人を殺さむと謀て龍首ハ玉を得させ

よと云るなりと思知ぬゆゑ〇何と云ふた今ハと云

ハ赫映姫を疎あしく思ふ家近むに寄むと宣ふなり嵯我院巻

に今世の男ハ先人を得幽なるすむひと淋げなるを見てハ

れむは後の煩々なると思惑て何と云ふ土をたふす

なむ上妻問の段は何なりよりあはれと宣ふものぬと云ハ

姫より疎むと云るなり此ハ異なり〇家に少く残りけり物

どもハ上殿の内ハ絹綿錢など有限なりと遣ふゆゑ

と云ハ残ハ甚少なり〇玉とぬ者よりむむハ玉取を獻ら

すよと賞祿をも賜べしと然と玉とぬ者よりむむハ害を

せりしと悦ぶ物を賜ふと云ふなり

とて... 離れ... 首尾... 紀朝臣... 貞女... 負節... 詞莫... 能者...

○離れ... 首尾... 紀朝臣... 貞女... 負節... 詞莫... 能者... 宇治... 牙... 処に

季経... 清輔... 此更... 第を語... 可笑... 宇治拾遺... 一のバ... 字諸本... 居... 万葉... 春霞流



事と仰ゆふ更哉と龍の玉取は遣はるる終へ人々は云合ふし更もて  
世に附もなく道理はあはくぬ更ハ爲得るべきと云意なり。此ハせ  
ても難成とせよと君より仰る无理なる更形まハ何れぬ更と云と  
臣の其を承て爲不得ハあへぬと云し。鶉草菅不合命と申御名の  
義は如く爲不合意ある古事記 近飛鳥 天皇御父の仇雄畧天皇の  
宮段 御陵と仁賢天皇少壞て歸  
漢文よりハタ 既以是恥足示後世とある足字 漢文よりハタ と何れぬと訓  
る意なり 傳卷九卷 四十三 可考 ○何れぬと云ふハ類本此ハ何れと云言な  
し其も宜うと云ふハ堪字を書きと字書に口含切勝也任也可也  
とありと云ふと活用言なり其事をよく心得て爲得る人と堪能  
と云ふ其を成ると何れぬと云ふハ不堪と云ふと云ふ不合と云ふ同意な

ふと以て知べし是も例の一與より此段を殊に人笑をいづく一際  
をこの書に記すなり

直考

○初 火鼠の裘と云なる物ハ諸本火鼠の皮と云なる物買と云ふ  
衣と云ふ。赫映姫は始と云出さる処も王卿の答は文も共  
に皮衣と何れハ必脱ふりと云はれ今補つ ○三丁 王卿の答の文  
に音も聞ども未見ぬ物なりと云を類本にいまふと云ふと云ふ  
物なりと云ふと云ふ ○十七 御顔を草の葉の色してハ鳴門中將物  
語 藏人帝の御心よき女の方と 御氣色何と云尋出さるる  
咎有べき由を仰らる藏人青さめて罷出ぬとあり ○卅四 大伴大納



言、我弓の力い云と宣ふる万葉卷三安積皇子薨之時、大伴イミラフの心  
 振起し、劔刀腰ツキダシに取佩、梓弓スサキ鞆取負て云又反歌大伴の名に負鞆帶て万  
 代に憑ツクミし心ウツつゝゝのよせむ。又卷七詠月、鞆懸る伴雄廣き大伴に國采之  
 すと月ハ照るし此哥ハ火鼠裘段の始に猶神代紀、姓氏録にも見之  
家廣とを證ともす  
 大伴氏ハ鞆負ユキヒのかとみく代々射術イハヒに勝イカまイハぶイハちイハなるイハこと  
 知べし

竹取翁物語解卷三

